

## 『和歌浦名所』を読み歩く

ここに展示しています史料は平成6年に当館に寄贈された北一夫氏旧蔵の文書群の中に含まれていたものです。既にご承知のとおり和歌浦は、今年(平成20年)4月に県の史跡として指定されました。それで、この機会を利用して紹介することにしました。

この「和歌浦名所記」は、江戸の出版書肆である仙鶴堂・鶴屋喜右衛門店から文政4(1821)年に出版された『和歌浦名所文章』(一名『和歌名所記』)と名付けられた往来本(寺子屋などで手習いの教科書として使用された本)から写し取ったものと考えられますが、細かな部分で誤字や省略が目立ちますので、あるいはこの本を原本としたのではなく、この本を元にして写し取ったお手本が元々間違えていたという可能性もあります。

内容は、いずれも高松茶屋を出発地点として、和歌浦周辺の名所・旧跡を回って行くというものですが、そのコースはげいこうせき 狛口石・きゅうがん 亀遊岩・かくりゅうとう 鶴立嶋・養珠寺・妙見堂・玉津島社・芦辺の茶屋・妹背山・下馬の橋・東照宮・天満宮・片男波(浦辺に出て眺めるだけ)・西浜通りに出て帰途につくという順路を取っています。

細かな部分の誤字や省略は、『和歌名所記』の一部の複製と比較していただくこととして、いずれも和歌浦の歌枕を多用している点は共通していますが、この「和歌浦名所記」は、途中から完全に韻をふんだかたちに行っているのが特徴と言えます。

いずれにせよ、万葉の昔から宮中公卿たちの憧憬の的であった和歌浦が江戸時代に入ると、往来物として江戸の町の庶民の間にまで浸透していったという事実と、それが全国に広まったであろうと思われる点は、和歌山県人として誇りとして良いのではないのでしょうか。

(文責：須山 高明)